



呪術師に変身！——東北タイにおけるパーサバイ

津村 文彦 福井県立大学准教授

万能という、夢のある触れ込みにはいかがわしさがつきまとうものだが、たしかにそこには万能と云っていい布がある。一枚の布が頭巾、腰帯、バスタオル、手ぬぐい、風呂敷、制服など何役もこなし、いかようにも人を変身させてくれるのだ。しかも面倒なコツもいらぬ。

万能布パーカオマー

東北タイの呪術師のところで話を聞いていたときのこと。頭から血を流した老人が訪ねてきた。草刈りの途中で、物が倒れてきてぶつかっらしい。呪術師は壁に掛けてあった布を取り、さっと自分の肩に掛けて、患者の傷口の処置を始めた。彼は、呪文を唱え息を吹きかけて、外傷や骨折、毒蛇の咬傷までも治す術をもっている。気になったのは、治療儀礼のときに肩に掛けた、お世辞にもキレイとはいえない布のことだ。それは東北タイではどこでも見かけるチェック柄の木綿の布パーカオマーであった。

パーカオマーはさまざまな用途に役立つ農民の必需品だ。暑い日には頭に巻いて帽子代わりにするし、腰に巻いてベルトにしたり、水浴びのあとの体拭きにも、手ぬぐいにも、物を包む風呂敷にも用いられる。呪術師はそんな何でもない万能布をわざわざ肩に掛けてから治療儀礼を始めたのだ。いったいなんのために？

さを演出する。また僧侶の説教を聞くとき、僧侶の托鉢に布施するときなど、仏教に係るイベントでは、多くの人が布を肩に掛ける。村の暮らしてもオシャレに気をつかう女性たちは、白い綿のレース地のパーサバイを身にまといて寺に向かう。

とはいえ、日常生活のなかでは、肩掛け布は「肩に掛けること」が最重要で、素材や模様は二の次であるようだ。たとえば、村の葬儀のこと。火葬台で故人に最期の別れを告げる参列者たちを眺めてみると、肩掛け布にはかなりの融通がきくようだ。本来は「僧衣のように左肩に掛けるもの」とされるが、右肩に掛けたり、はたまた暑い日の汗拭きタオルのように首に掛けている者までいる。使われている布もさまざまだ。白い綿のレース地はむしろ少数派で、万能布のパーカオマー、普通のタオルまであるではないか。しかも色も白とは限らず、青やピンクのタオルも。とにかく何かの布を肩に掛けることが大切なのである。

とにかく何かの布を肩に掛ける

パーカオマーにかぎらず、肩掛け布は、タイ語で「パーサバイ(サバイ布)」「パーパートバー(肩に掛ける布)」とよばれる。もとは僧衣で、左肩に掛ける布を指していたようだが、俗人も寺に参るさいに古くから身に付けてきた。寺という神聖な場所では、純粹さを象徴する清潔な白い布が好ましく、僧侶と仏陀に敬意を表するのにふさわしい衣装と考えられている。しかし信仰心を象徴する小道具というだけではなく、オシャレの要素も大きい。結婚式などで伝統衣装を着るときには、金糸で模様が施された美しいシルクの布を、左肩と右脇腹に褌のように通して、長く後ろにたなびかせて優雅

聖なる力そのもの

呪術師の話に戻ろう。彼によると、肩掛け布は、清潔であればなんでもよいが、布を身にまといてから術をおこなうのが手順のようである。布をまとうことで宗教的なモードに変わるといのは、変身ヒーローの小道具さながらである。呪術師は言う。「呪術師になる儀礼」のときに、肩に掛けた白い布は取っておかなければならない。その布を捨ててしまえば、呪術師の身体から聖なる力は消えて無くなってしまふ。あの布は聖なる力そのものである。

そういえば十数年前に調査の過程で、わたしが呪術師に弟子入りをしたときも、師匠が用意してくれた白い布を肩に掛けて呪術師になるための最後の儀礼に臨んだ。あの薄汚れた白い布がそんなに大切なものだったとは。いったいどこにしまったのか、覚えがない。変身ベルトを無くしてしまつては呪術師失格である。



毎年5月に開かれる年中行事ブンパンファイ(ロケット花火祭り)での行列



村の葬儀で故人に最期の別れを告げる人びとの肩に掛かるタオル



薬の力を強めるため術をおこなう呪術師

土地の女神に祈りをささげる呪術師